

ヤングケアラーと病気のある親の家族関係 ——元ヤングケアラーの語りの分析から——

長谷川拓人（成蹊大学大学院）

ヤングケアラーとは、病気や障害などを抱える家族の世話をする18歳未満の子どもである。家庭に介護や看護、見守り等のサポートが必要な家族がいる場合には、子どもであっても大人が担うようなケア責任を引き受ける状況が起きる。日本では、2020年から2022年にかけて、厚生労働省と文部科学省によってヤングケアラーに関する全国規模の実態調査がなされており（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社2021；株式会社日本総合研究所2022）、回答した小学6年生の約15人に1人、中学2年生の約17人に1人がヤングケアラーであることが明らかにされている。ここで回答した子どもが平日1日あたりにケアに費やしている時間は平均3～4時間であり、中には1日に7時間以上ケアしているケースもあった。

一般的に、子どもは親などの家族から身の回りの世話をされる対象として見なされているが、ヤングケアラーの場合には、日常的に病気や障害のある人をケアし、その家族の代わりに家事を担い、必要なときには収入を家に入れることもある。ヤングケアラーとその家族の関係は、一般的な親子に見られるような「子ども」と「親」よりも、「ケアの与え手」と「ケアの受け手」という側面が強くなる。

本研究では、精神障害のある親をケアしてきた元ヤングケアラーへのインタビュー調査から、ヤングケアラーとケアされる親の関係性を論じる。分析の対象とするインフォーマントは、特に家を出た経験のあるケースに絞り、離家によってその後の家族関係は変化したかについても見ていく。

研究では、2021年1月から2022年4月にかけて筆者が実施した、子どもの頃から親のケアを担っていた経験を持つ3名の元ヤングケアラーへのインタビューデータを分析する。インタビューデータは文字起こしをした後にコーディングしている。調査データの扱いにおいては、匿名化した上で、学術目的でデータを使用することの許可を受けている。

分析を通して、ヤングケアラーはケアを必要とする親や他の家族の状況を配慮するがゆえに、親に対して頼ったり自分の思っていることを言ったりすることが難しくなり、一方では、ケアされる親は自身の体調と向き合うことに精一杯でゆとりが持たず、こうした中で、ヤングケアラーとケアされる親が互いに優しく接することができなくなる状況が明らかになった。ヤングケアラーの離家後の状況を見てみると、子どもには家族と同居している時に比べて余裕があり、家族の方もヤングケアラーがどれほど家庭に貢献していたかを実感することによって、ヤングケアラーとケアを要する親はお互いに思いやりを持てるようになり、親子の関係は、ケアを介さなければ存在していたはずの「子ども」と「大人」へと少しずつ変わっていくことが示唆された。しかし、ヤングケアラーは帰省を通して、こうした関係が「幻想」であると気づくことも明らかになった。実家に帰れば、そのほとんどの時間を家族のケアにあてることになり、親との関係は離家する前の状況へと戻るからである。

以上、本研究では、ヤングケアラーとケアされる親の特殊な関係性を捉え、両者の間に「子ども」と「大人」という関係が生まれたとしても、ヤングケアラーは「ケアされる子ども」になるわけではなく、親を「ケアする子ども」であり続けることを示した。

参考文献

株式会社日本総合研究所, 2022, 「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」
三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社, 2021, 「ヤングケアラーの実態に関する調査研究について」

キーワード：ヤングケアラー、家族関係、離家